

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23320015

研究課題名(和文) ファシズムと宗教文化に関する地域・時代比較的综合研究

研究課題名(英文) Comparative Study of the Relationship between Fascism and Religious Cultures in Different Regions and Times

研究代表者

深澤 英隆 (FUKASAWA, Hidetaka)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：30208912

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,100,000円、(間接経費) 3,630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、政治現象としての広義のファシズムと宗教文化との関連を、過去と現在、および広範な地域におよぶ事例にもとづきつつ解明することを目的としてなされた。本研究では、1)ファシズム現象の宗教的特質、2)ファシズム期における宗教および宗教研究、3)ファシズム現象と宗教運動との関連、などの諸点に着目し、ファシズムという特異な政治現象と宗教的なものに関わる文化諸現象とがどのような相互作用のもとにあるのかを解明することが試みられた。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research project was to elucidate the relationship between fascism as a political phenomenon and religious culture in different regions and times. In this project we addressed chiefly three problems: 1) the religious character of fascist movements and cultures, 2) studies of religion and myth in the fascist era, 3) the relationship between fascism and various (especially pre-fascist) religious movements. Our study of these issues enabled us to clarify the complexity and variability found in the relationships between fascist movements and religious cultures.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：宗教 ファシズム 宗教学 神話 政治と宗教 ナチズム 宗教文化 宗教運動

## 1. 研究開始当初の背景

ファシズムの宗教性という問題は、すでに1920年代のヨーロッパにおけるファシズム運動の生成期より、ある程度指摘がなされていた。しかし、第二次大戦後においてファシズム研究が蓄積されながらも、こうした問題は看過されたままであった。

しかし1980年代以降、これまで看過されがちであった宗教と政治との関係をめぐる研究が、政治学においても宗教研究においても次第に活発となり、そうしたなかでファシズムや、より広く全体主義と宗教との関係を問い直す動きが出て来た。また、宗教学史の研究の進展とともに、ファシズム時代の宗教研究の様相を問う研究が次第になされるようになった。

研究代表者らは、2006年度より2008年度にかけて行われた科学研究費補助金基盤研究(B)「ファシズム期の宗教と宗教研究にかんする国際的比較研究」(研究代表者：竹沢尚一郎)における共同研究を通して、こうした問題関心をさらに深めるとともに、この研究分野がなお未開拓と言っているほどに多くの研究課題を残していること、また方法面でもさらに多様なアプローチが必要であること、加えて複数の、専門分野を異にする研究者による共同研究が不可避である事を痛感し、本研究の着想に至った。

## 2. 研究の目的

本研究は、とりわけ以下の3点の解明を目的としてなされた。

(1)ファシズム現象そのものの宗教性をめぐる考察：政治現象としてのファシズムを準宗教的現象として考察する観点、例えば2000年より刊行されている雑誌、*Totalitarian Movements and Political Religions* 誌などで論じられているが、そこでの議論はもっぱら政治学の方からなさ

れている。これに対し本研究では、宗教研究の側からファシズムの宗教性を明らかにすることを試みた。

(2)ファシズム期における宗教学をめぐる考察：宗教研究史の解明の必要性が唱えられて久しいが、宗教研究が政治的にもっとも顕著な変質と政治的コミットメントを経験したファシズム期の宗教研究については、なお十分な検討がなされていない。本研究では、欧日の事例の比較検討を通じて、個別事例にとどまらず、ファシズムを含む政治と宗教研究との関係をめぐる一般問題にまで解明の光をあてることを目指した。

(3)ファシズムと宗教運動との関連をめぐる考察：ファシズムと宗教運動との関連は、ファシズム下での諸宗教の動向と、ファシズムを準備した宗教的プレ・ファシズムとファシズムとの関連の問題に分けられる。特に後者の問題は、これまで十分な研究がなされてこなかった領域である。さらに、本研究では過去の事例のみならず、また狭義の宗教運動を超えた、現代の宗教文化、宗教的サブカルチャーにおいてファシズム的表象世界がどのように援用され、宗教文化の一部を形成しているかについても考察を加えた。

## 3. 研究の方法

本研究は、各研究者がそれぞれの研究領域・研究対象を、文献研究やフィールド調査などを通じて多方法的に研究するとともに、各年度複数回の研究集会を催し、共同討議を行ってゆくというかたちでなされた。研究成果は年度ごとに各自の報告や、また共同のパネル等で、学会において発表してゆくとともに、学術雑誌・図書等への寄稿を通じて逐次公開された。

## 4. 研究成果

3年間の研究成果を、研究目的の項でしめ

した3点の研究目的に即してまとめるならば、以下ようになる。

(1)ファシズムの宗教性をめぐっては、まずナチズムやイタリア・ファシズムの類宗教性の問題に関わるこれまでの研究史のレビューを行うとともに、こうした視角そのものの妥当性を問い直すことがなされた。その結果、政治学などにおける研究は一定の有効性をもつものの、宗教や宗教性、あるいは政治宗教や政治神学といった語の規定がしばしば安易であり、ファシズム現象の十全な説明に必ずしも資するとは限らないことが確認された。そのうえで、まずはファシズム現象に内属する宗教的要因、すなわち民族・国家等の準宗教的志向対象や、そこに向けられた志向性の宗教的性格を分析してゆくことが、宗教研究の側からなされるべきことであること、その際とりわけ種々の政治的祭儀と政治的言語使用に着目がなされるべきであること、そうした諸表現における宗教的なものの明示的な行使と非明示的なそれとの区別がなされるべきことなどを確認した。

(2)ファシズム期における宗教学の諸相については、欧日の諸事例を個別に検討するとともに、比較対照をも行った。まず日本の事例では、宇野圓空の業績の全体像を精査して、日本型ファシズムにおける「南進」の系譜やナショナリズムの高揚への関与について考察した。そこから、宇野が提唱した宗教民族学が、純粋な学術活動から、次第に国策との親和性を増大し、日本ファシズムへの関与を強めた時代状況が明らかになった。また日本のファシズム期における神話研究を明治以降、平成の現代に至るまでの日本神話研究の流れの中に位置づけ、それを同時期の他のファシズム国家での研究と比較した。同時に、狭義のファシズム期とファシズム国家以外の時期と地域からの神話研究の事象を検討し、ファシズムという概念そのものの拡張によって、より広い視野からの比較研究が可能

になることをも確認した。またイタリア・ファシズムと宗教学との関連では、イタリア宗教史学を軸に検討を行い、ファシズムに注ぎ込んでいる伝統主義とモダニズムがともに宗教史学という学問と密接な繋がりを有していることを解明した。さらに、ルーマニアにおけるファシズム運動の思想的局面として、運動への賛同者であるナエ・ヨネスク、エミール・シオラン、ミルチャ・エリアーデら知識人について研究を行い、ナエ・ヨネスクの個人的カリスマの影響力、シオランとルーマニア文化との複雑な関係性、エリアーデのファシズム運動への関与と後の断罪に対する態度の問題性などを検討した。全体を通じて、ファシズム期の宗教研究は、ファシズム政治体制に制約を受けるのみならず、ファシズムの世界観と大なり小なり呼応する研究姿勢と研究内容をもつ場合が少なくなかったことが見いだされた。しかしその一方で、ファシズム期の宗教研究を安易にファシズム親和的と特徴づけることの問題性をも確認することとなった。

(3)ファシズムと宗教運動との関連をめぐる考察は、ファシズム下での諸宗教の動向と、ファシズムを準備した宗教的プレ・ファシズムとファシズムとの関連の問題に分けられる。前者については、ナチズム政権下で「ナザレのイエス」をユダヤ的存在あるいはアーリア的存在として表象するという(学問的・宗教的)営みが、当時の民族主義(フェルキッシュ)的な宗教思想運動の文脈において持ちうる含意を分析したほか、キリスト教系の民族主義宗教運動(特に、反ユダヤ主義的世界陰謀論を思想的中心とするマティルデ・ルーデンドルフの運動並びに、偽書『ウラ・リング年代記』研究者である民族主義的文献学者ヘルマン・ヴィルトの著作)に関する一次資料並びに二次文献の蒐集と検討を行った。プレ・ファシズムとの関連では、とりわけドイツの最も有力な民族主義宗教運動であつ

た「ゲルマン信仰共同体」の思想と運動を検討するとともに、この運動がナチス政権下で経験した変転のうちに、ファシズム政治と宗教運動との錯綜した関係を跡づけた。また第二次大戦後から現在に至る「ゲルマン信仰共同体」の推移を検討し、そこに見られる現代のサブカルチャーとしてのペイガニズムにおいてファシズム的要素がいかにかに存続しているかを分析した。

以上の研究成果は、いずれも国内外において先行研究をほとんど見ないものであり、またそのいくつかはすでに外国語によって発表され、一定の評価を得ることができた。今後の課題ないし展望としては、ファシズム研究一般の進展に相応するかたちで、宗教とファシズムとの内的・外的連関を理論化する枠組みを精練させること、なお未解明な数多くの事象・事例の資料探索と分析とを蓄積すること、加えて方法論的な熟考を経た比較研究を組織的に試みることなどがあげられるだろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 14 件)

江川純一、「呪術的思考の環流 フレイザー・モース・レヴィ＝ストロース」、『Art Anthropology』09号、2014、34-37、  
査読無

鈴木正崇「伝承を持続させるものとは何か 比婆荒神神楽の場合」、『国立歴史民俗博物館研究報告』No.186、2014、1-29、査読有

久保田浩「ドイツ連邦共和国における『宗教学』の制度化を巡る諸問題」、『東京大学宗教学年報』、30(特別号)、2013、139-158、  
査読無

平藤喜久子「外国人が見た古事記」、『國學院大學研究開発推進機構紀要』第5号、2013、78-92、査読有

久保田浩「『ユダヤ人イエス』の実践性

シオニズムとドイツ民族主義宗教における」、『キリスト教学』、第53号、2011、1-25、  
査読有

〔学会発表〕(計 16 件)

深澤英隆「ドイツ民族主義宗教運動における神話表象」日本宗教学会第72回学術大会、2013.9.8、國學院大學、東京

松村一男「ファシズム期の非イデオロギー的宗教研究」日本宗教学会第72回学術大会、2013.9.8、國學院大學、東京

平藤喜久子「ファシズム期と日本神話」日本宗教学会第72回学術大会、2013.9.8、國學院大學、東京

鈴木正崇「修験道は民族宗教か？ 宗教人類学の立場から」日本宗教学会第72回学術大会、2013.9.7、國學院大學、東京

深澤英隆、新免光比呂、江川純一「ヨーロッパのキリスト教とファシズム ルーマニア・レジオナル運動を中心に」、『みんぱくゼミナール』、2013.1.19、国立民族学博物館、大阪、招待講演

深澤英隆「自然と救済をめぐる闘争—クルト・レーゼとドイツ民族主義宗教運動」シンポジウム「宗教的なるものと文化保守主義 日本並びにドイツの変容する社会における宗教の文化的機能(第二部)」立教・チュービンゲン国際シンポジウム、2012.11.1、立教大学、東京

鈴木正崇「伝承を持続させるものとは何か」日本民俗学会第64回年会、2012.10.6、東京学芸大学、東京、招待講演

深澤英隆「自然的救済論/救済論的自然」の概念」日本宗教学会第71回学術大会、2012.9.8、皇學館大学、三重

江川純一、「ペッタッツォーニ宗教史学の出発点」芸術人類学研究所講座、2012.8.25、多摩美術大学芸術人類学研究所、東京、招待講演

江川純一、「ペッタッツォーニ宗教史学再

考」、公開講座「宗教学、社会学、民俗学の  
起源 ヨーロッパと日本の共振」、  
2012.6.28、多摩美術大学、東京、招待講演  
FUKASAWA, Hidetaka, “ ‘ Visuelle  
Pietaet ’ in der voelkischen  
Religiositaet: die Interferenz von Kunst,  
Politik und Religion im Falle des Malers  
Fidus ”, Internationales Symposium: Das  
Religioese und der kulturelle  
Konservatismus. Zur kulturellen Funktion  
der Religionen in den sich wandelnden  
Gesellschaften Deutschlands und Japans,  
2011.11.3, Universitaet Tuebingen, ドイ  
ツ

KUBOTA, Hiroshi, “ ‘ Jesus von  
Nazareth ’ in der voelkisch-religioesen  
Bewegung ”, Internationales Symposium:  
Das Religioese und der kulturelle  
Konservatismus. Zur kulturellen Funktion  
der Religionen in den sich wandelnden  
Gesellschaften Deutschlands und Japans,  
2011.11.3, Universitaet Tuebingen, ドイ  
ツ

久保田浩 『ユダヤ人イエス』と近代ドイ  
ツ』、日本宗教学会第70回学術大会、2011.9.3、  
関西学院大学、兵庫

〔図書〕(計 9 件)

深澤英隆、松村一男他 『世界の宗教といか  
に向き合うか』、325(38-52, 260-283)、聖  
公会出版、2014

松村一男 『神話思考』、780、言叢社、2014  
MATSUMURA, Kazuo, *What can we learn from  
Comparative Mythology?*, 294, Countershock  
Press, 2014.

松村一男、平藤喜久子、他編、『神の文化  
史事典』650、白水社、2013

久保田浩他 『文化接触の創造力』、272(1-14、  
175-203)、リトン、2013

平藤喜久子他 『日本民族学の戦前と戦後

岡正雄と日本民族学の草分け』、  
507(211-224)、東京堂出版、2013  
HIRAFUJI, Kikuko et al., *Kami Ways in  
Nationalist Territory Shinto Studies in  
Prewar Japan and the West*, 277(75-107),  
Verlag der Oesterreichischen Akademie der  
Wissenschaften, 2013.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

深澤 英隆 (FUKASAWA, Hidetaka)  
一橋大学・大学院社会学研究科・教授  
研究者番号：3 0 2 0 8 9 1 2

### (2) 研究分担者

鈴木 正崇 (SUZUKI, Masataka)  
慶應義塾大学・文学部・教授  
研究者番号：1 0 1 2 6 2 7 9

山中 弘 (YAMANAKA, Hiroshi)  
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・  
教授  
研究者番号：4 0 2 0 1 8 4 2

松村 一男 (MATSUMURA, Kazuo)  
和光大学・表現学部・教授  
研究者番号：7 0 1 8 3 9 5 2

久保田 浩 (KUBOTA, Hiroshi)  
立教大学・文学部・教授  
研究者番号：6 0 4 3 4 2 0 5  
(平成24年度より研究分担者)

新免 光比呂 (SHINMEN, Mitsuhiro)  
国立民族学博物館・民族文化研究部・准  
教授  
研究者番号：6 0 2 6 0 0 5 6

平藤 喜久子 (HIRAFUJI, Kikuko)  
國學院大學・研究開発推進機構・准教授  
研究者番号：5 0 3 8 4 0 0 3

江川 純一 (EGAWA, Jun-ichi)  
東京大学・人文社会系研究科・研究員  
研究者番号：4 0 6 3 6 6 9 3  
(平成24年度より研究分担者)

### (3) 連携研究者

竹沢 尚一郎 (TAKEZAWA, Shoichiro)  
国立民族学博物館・先端人間科学部・教  
授  
研究者番号：1 0 1 8 3 0 6 3